

京都市内の国有林を活用した環境教育の取り組み —京都伝統文化の森推進協議会、林野庁、大学の協働—

高桑 進

1. はじめに

2000年当りを境にして、全国的に「里山」という言葉が流行になった感がある。それ以前からも、使用されはいたが、それほど一般的ではなかったと思う。各地で、団塊の世代を中心としたNPO活動が盛んになり、元気な中高年がかったの遊び場であった里山に回帰している。また、バブルの崩壊でゴルフ場となっていた里山の価値が見直されて来たことや、戦後の行き過ぎた開発行為がもたらした自然破壊について人々が反省し始めたこともあろう。21世紀に入り、今までの経済的な発展の影で、忘れ去られた生活の知恵や伝統的な日本の森林文化への目覚めも背景にあるといえる。

一方、高齢化と後継者難で中山間地をはじめとして耕作放棄の水田が全国的に増えている。このような現状は、農林業政策の失敗の結果である。すなわち、農業政策では関税の自由化を受け入れる代わりに飲まされたミニマムアクセス米の購入が米価下落をもたらした、兼業農家が増えた。さらに自国の穀物自給率を下げ続けてまで減反政策を継続してきた結果である。また、林野庁は独立採算制のもとで貴重な天然林の乱伐と森林破壊をもたらした行き過ぎた植林活動を押し進めて来た。すなわち、木材生産を目的とする林業と、水源涵養等の環境保全を目的とする森林保護とは別であるとの認識が林野庁には欠けていたといえる。その結果、20数年間で3兆円を超える借金が累積された。そのつけは、法律改正で全て国民の税金で支払われる仕組みが出来上がったのである。

このような我が国の農業や林業の極めて深刻な現状を、里山での環境教育を通して学生達に知らせたい。将来の日本列島の自然環境をどのように保全、保護して行かなければならないか。安全で安心出来る持続可能な社会を作り上げるための政策を学生達に考えさせたい、と考えている。そのためには、リアルな環境教育としてまずは実際の里山

に足を運ばせなければならない。具体的な森林における体験型学習が、平成生まれの今日の大学生に必要とされているのである。

2. 里山を活用した環境教育の取り組み

2-1. 大学間里山交流会の生育史

大学間里山交流会は、2003年10月に京都女子大学で開催された「里山を活用した環境教育の取り組み」というテーマのシンポをきっかけとして、京都女子大学が中核となり九州大学、金沢大学、龍谷大学の4大学間でネットワークが誕生した。

2004年2月に九州大学元岡にある新キャンパスに出かけて、100haもの環境保全ゾーン内に作られた小さな池で学生達と、カスミサンショウウオとアカガエルの産卵状況を観察し、大感激した。その年の5月には、京都女子大学と龍谷大学の学生達と一緒に金沢大学角間の森にあるキタダンの棚田で田植え体験をさせて頂いた。金沢大学の副学長を始め、棚田のオーナーなどからも大歓迎されて、初めての棚田での田植えを楽しんだ。9月の夏休みには、各大学から学生達が京都女子大学に集まり、それぞれの大学の森で行ってきた環境保全活動の内容を発表した。その後市内左京区大原の奥にある自然林である「京女の森」に移動して、京都市の二ノ谷管理舎に宿泊し学生の交流会を持ち、翌日は24ヘクタールある元薪炭林で天然更新した「京女の森」を女子学生達が他大学の学生に案内した。このような里山を通しての交流活動を通じて、大学生達の交流が深められたことは大変有意義であった。

2004年4月からは、この4大学間里山交流会は「里山を活用した環境教育の取り組み」として、龍谷大学の里山学ORC地域共生学プロジェクトの一貫として位置づけられた。2005年も前年同様なスケジュールで、各大学間で学生の交流が持たれた。9月には、金沢大学の里山保全の会のメンバーが京女の森に来られて、学生達との素晴らしい交流が開かれたのは記憶に残っている。12月には、各大学の学生達が龍谷荘に1泊して交流を深めた後で、翌日に龍谷の森を案内し自然観察をした。その後も、毎年2月には九州大学に、5月は金沢大学に、9月は京都女子大学で活動報告会を開き「京女の森」を案内し、12月には「龍谷の森」を案内するというプログラムが完成した。

2004年から、龍谷大学の里山サークル「きのっこ」の会が大活躍した。橘冬樹君と今井薫平君がそのリーダーであった。九州大学では、生田篤君と酒徳俊君が中心となり

活躍した。京都女子大学では生命環境研究会のゼミ生、武田聖子さん、坂岸由香利さんが中心メンバーであった。このように各大学に活動中心となる熱心な学生がいたことが、いままでの大学間里山交流会がうまく機能した大きな原動力であるといえる。

2006年に中部大学の寺井久慈先生から、この4大学間里山交流会に参加したい旨の連絡があり、2007年9月に中部大学で5大学間で里山交流会が開催された。この時、清水建設の方が環境に配慮した公園工事施工例を報告され、建設業界も環境に配慮する工事をする時代になったことを確信した。その後、移動して中部大学の武並研修所での交流会で長野大学の佐藤哲先生と高橋一秋先生にお会いし、長野大学もこの会に参加されることになった。これ以後は、参加大学数を入れないで、単に「大学間里山交流会」とする事でより多くの大学の参加を促すこととした。

そうして、2008年9月の長野大学での大学間里山活動報告会が開かれたことは、この会を立ち上げた者としては大変嬉しい限りである。今後も、より多くの大学、より多くの大学生が里山での保全活動や里山での環境教育活動に参加する輪を広げてゆきたいと願っている。

最近、体験活動はインターンシップとして位置づけられて来ており、今後は大学と各地の行政機関やNPO団体、あるいは企業との連携と協働が里山を通じて展開されてゆくものと考えている。

2-2. 生命環境教育の展開

平成7年から、「京女の森」をフィールドとして全てのいのちを大切にす環境教育として「生命環境教育」を提唱してきた。

これは、一人一人の若者の抱える問題は多岐に渡り複雑化しており、対症療法としては心理療法士や専門家のお世話にならないといけない場面が増えて来ている。「生命環境教育」はこのような問題を根本的に解決する方法として体験的に編み出した環境教育プログラムである。

先進諸国で見られる様々な社会問題、とくに若者の生きる力の不足は、私から見るとどうも自然との接点が少なく、3K（危険、汚い、きつい）を避ける傾向が生活習慣に根付いて来たためでないかと思われるからである。あまりにも便利すぎる生活環境で育つことで、なるべく楽をしよう、答えは先生やコンピューターに聞けば教えてもらえる等、

便利すぎて安易な行動が多くなる傾向が見られることは多くの教育関係者が指摘している。その対策として、私は若者達を森に連れ出して1時間でもいから歩かせることが有効であると、平成7年から始めた森林での月1回の自然観察会の実施という体験活動を通して確信するようになった。できれば、丸一日里山や近くの森林に連れ出して不思議で美しい様々ないのちと向き合う自然体験が不可欠である。

つい最近も、集中講義の最終日に京都市内の大学生を数名引率して「京女の森」を案内した。驚いたことに、茶髪の男子学生が虫を見て「やめろよ！オレは苦手なんだから！」と叫んでいるではないか。ところが、女子大生の方は平気な顔で、虫だろうがキノコだろうが素手でつかんでいるのである。これをみて、ここまで来たかと思った。小さい時から虫がいらない清潔な環境で生活して来た多くの学生達は、虫が生活できる自然環境が当たり前ではなくなって来ているのである。

いのちの大切さを教えようと、いくら叫んでみても、虫を見て驚き嫌がるようではだめである。やはり、自然界の生き物に対するいわれなき偏見はなくすることが第一歩である。森という生態系が持つ不思議な力を今時の学生達に体験させることから環境教育を始めなければならない。

往復で3時間もかかるが、日帰りでの「京女の森」での体験学習を、積雪がない4月から12月の間毎月1回は行って来た。参加した学生達の多くが、「なんか癒された感じがします。とても来て良かったです」ということを、聞いてこのような活動が有意義であると感じている。この忘れ去れた里山である「京女の森」での自然体験学習活動は平成7年から続けているが、問題はこの森が大学から車で1時間半かかる場所にあることである。

3. 京都市内の国有林を活用した環境教育の取り組み-京都伝統文化の森推進協議会、林野庁、大学の協働

3-1. 阿弥陀ヶ峰国有林の活用

京都女子大学のある京都市東山区には豊国神社があり、阿弥陀ヶ峰山頂には豊臣秀吉の墓である巨大な五輪塔がある。以前より、ここは豊国神社の所有地であると思っていた。確かに一部はそうであるが、実はもともと妙法院の寺領であった所が、明治政府の上地令で取り上げられてしまいそのまま国有林となっていたのである。

ご存知のように平成12年から林野庁は、全国にある国有林を「遊遊の森」として教育機関との協定を結んで森林環境教育に使わせている。

この阿弥陀ヶ峰国有林は本学に隣接した東山丘陵に位置し、本学正門から歩いて5分である。こんな近くに国有林がある大学も全国的には珍しいであろう。この国有林を使わせて頂ける協定を、林野庁と大学との間で2008年9月に結んだ。

この国有林地は山城国風土記に、鳥部の衆が白鳥や鶴を捕獲して天皇に献上していた、と記されていることから、「京女 鳥部の森」と命名させて頂いた。今後5年間は、自然観察を始め、これからスタートする予定の「森と太陽の案内人」制度（仮称）を活用して様々な環境教育に利用してゆくことが出来るようになった。

一方、この阿弥陀ヶ峰国有林は京都市内にあることから京都市の景観条例の適用をうける可能性が出てくるので、京都伝統文化の森推進協議会とも連携した。今後は、サポーターや市民とともに協議をしながら東山の景観を変えるような間伐作業もできるようになった。

京都の東山、北山、西山は、伊勢湾台風が襲来して大量に風倒木被害が出てから50年経過して今や年中緑色の景観をしている。なぜなら常緑樹であるシイやカシに被われてしまったからだ。そのため林内は暗くなり、赤松は松枯れ病で、カシノキはカシノナガキクイムシで大きな被害が出ている。明治以前の絵図では、ほとんどが赤松林であった東山丘陵が今では常緑の森に植生変遷している。このような景観は、国際観光都市である京都の景観としてはふさわしくないという寺社等の意見で、被害木を伐採して桜や紅葉のような眺めて気持ちが良い落葉広葉樹林に代えて行こうという取り組みが始まっている。

ここ京都のようなまわりがかつての里山で囲まれた都市はあまりないだろう。人間から見て好ましい景観を維持するために里山を管理してゆこうという動きが出て来ているのである。このような積極的な管理が全国の里山でも必要であるが、ほとんどの里山は高齢化少子化により人の手が入らずに放置されている。

このような1300年以上前から使用されてきた、歴史ある里山をフィールドとして森林環境教育を展開出来る体制が出来上がったことは、大変嬉しい限りである。

今後は、林野庁、京都伝統文化の森推進協議会との協議にもとずいて、いままでに培

って来た自然体験活動プログラムを幼稚園や保育園の保育者となる学生や、初等教育に従事する学生をはじめとして、一般の学生達にも体験させたい。そうすることで実践的な環境教育指導力をつけさせてゆきたいと考えている。このプログラムで一定程度の実践力をつけた学生は、資格試験を開発して「森と太陽の案内人」(仮称)として認定してゆく計画である。